生田春月編『泰西名詩名訳集』について(2)

——その歴史的意義と問題点——

佐　野　晴　夫

温厚な小林愛雄は春月少年を励まして詩作を促し，また豊富で真摯な学殖で彼を広大で魅惑的な泰西の文学世界へ連れ出した。それだけに彼に外国語学習の必要を痛感させた。小林愛雄自身は，一方で，すでに「芸苑」「帝国文学」「明星」「東亜之光」などで発表してきた創作詩に新しい作物を加えて，明治40年4月に詩集「管弦」（彩雲閣刊）を刊行し，他方，大正元年12月には訳詩集「近代詞華集」（春陽堂刊）を世に問うた。彼は，愛誦してやまないブリッジェス，ガルスワアジィ，イエエツ，シモンズ，ビニヨン，デヴィス，ガニアニなどの詩を明治40年頃より訳しため，英詩84篇に，独逸詩3篇，仏蘭西詩4篇，希臘詩4篇，そしてスティヴンフィリプスの詩劇「パオロとフランチェスカ」の絶誦のくだりと歌劇をわが国へ移植しようと腐心した彼にふさわしく，グノオの「ファウスト」の歌詞を，そのアンソロジーへ収録している。その訳詩集より，春月はブラウニング「歓会」「別離」，スキンバアン「海に」，キリヤム・アアネスト・ヘンレエ「入院」「看護」，ロバアト・ブリヂェス「懶惰生活」，エドマンド・ゴッス「薔薇」，イエエツ「老人」「落葉」，ユウゴオ「わが歌に」，サフォ「夜来」といった12篇を採用している。

これらの多くは，「帝国文学」や「明星」へ寄稿したものと同一であるが，中には改作されたものもある。次に挙げるスキンバアンの「海に」は，小林愛雄がことのほか愛好した詩であり，これを記憶する春月は，明治42年5月の「帝国文学」に掲載された評論「スキンバアアンが思想の根低（ママ）」からとり出して来ている。

いと美（よ）き母なる海にゆかむ
さてわれひとり海の胸に，
おおこの美（は）しき白き母よ
母もなく生（め）れし白き母よ
うつせよわれにわが胸に。

人の恋なる海に入らむ，
寄添ひ，抱き，くちつけむ，
遠き世の日に姉もなく
君が御霊（みたま）の自由をば

この「近代詞歌集」の「序文」の中で，小林愛雄が各詩人の経歴と作品の特色について，ささやかながらも言及している点で，春月のアンソロジー編纂にヒントを与えている。また小林愛雄は大正5年4月に英国詩人中心に，独・仏・白・露の現代詩人35家をとりあげ，75篇の詩を口語で訳した「現代万葉集」（愛音出版部刊）を出版している。それらは平明で，かつ個性的な香りをもち，流暢で，かつ気品を失わぬ訳詩である。

小林愛雄は明治44年から大正5年まで京華中学校の英語講師となって，島田謹二たちを教え，大正9年からは早稲田実業学校で，英語ばかりでなく，——芸術一般に深い造詣をもつ彼にふさわしく——本邦で初めて商業美学を授業に導入し，商業実務として，ショウウィンドウやポスターなどの美術的効果について教授したりした。のちに常盤松女学校の校長，本郷中学校の副校長，そしてふたたび早稲田実業学校の校長を歴任し，昭和20年，敗戦直後に永眠した。

彼は，いわゆる文壇的勢力をもつにいたらず，また若き春月を文壇の檜舞台へのせるだけの力を有しなかった。けれども，彼の存在と指導がなければ，はたして春月がくじけず詩作をつづけ，心血を注いで外国語学習と訳業を続ける意欲を持続しえたか疑わしいほど，春月に感化を及ぼした人物である。

春月が生田長江の玄関番になることによって，たくさんの文人に面識をもった。とくに長江の一高や帝大の時代からの友人である森田米松，中村蓊，栗原元吉は，頻繁に長江宅に出入りしていた。そのうちの古城栗原元吉（明15～昭44）は，学生時代には「帝国文学」「明星」等において，海外文学の紹介と評論で活躍した。後年，東京女子大学，実践女専，東洋大学などで英文学を講ずる一方で，ラスキンやギッシングなどの作品を翻訳した。春月は「泰西名詩名訳集」に栗原古城のメレディス「歓楽ははやし」を収めているが，立正大学を退職するに先だち，大学院生を対象とした最終講義でメレディス「エゴイスト」を論じたごとく，栗原元吉はこの英国詩人を溺愛していた。ここでは，栗原古城訳ばかりでなく，生田長江と小林愛雄のものとくらべてみよう。

歓楽ははやし	歓楽は束の間	歓楽（よろこび）は疾し，
哀傷はおそし	哀傷はとこしへ。	悲哀（かなしみ）は遅し，
世に甘き恋を	世に甘き恋をば	いとあまき恋を
かなしみは蒔く。	哀しみは播きけり。	かなしみは蒔かむ，
	日も未だ暮れぬに	日の沈むまへに
日も暮れぬに	遠く去にしこの恋	飛びゆきし恋，
去にし恋，	恋をも知るべく	その恋を知りけるほどよ，

恋をも知るべく　　哀しみよ，わがものたれ。　悲よ，われにあれ。
哀しみよ我が有(もの)たれ。　　長　江　　愛　雄
古　城

生田長江訳は明治41年12月26日の春月の日記に記載されたものであり，小林愛雄訳は，「近代詞華集」から引用したものであり，いずれも2聯にわけられていない。栗原古城訳は，春月がどこから引用したのか，不詳である。というのは，明治41年6月の「明星」の評論「海外詩壇，ジョォジ・メレディス」の中に挿入されているものをとり出したと考えるならば，第1聯第1行の「はやし」が「迅し」へ，第2行「おそし」が「遅し」へ，第4行「蒔く」が「播く」へかわっていなければならない。また第2聯第1行の終りと第4行の「哀しみよ」のあとに句読点が欠けているからである。

メレディスをわが国で最初に紹介したのは，「帝国文学」の創刊時より「海外騒壇」で泰西の文学消息を報じてきた上田敏であろう。だがメレディスの難解な文体や特異な心理主義を，当時，理解しえたのは夏目漱石だと言われている。少くとも，彼等の3人の教え子を通じて，この期の東京帝大の英文学の研究と趣向の一端が，文学少年春月の詩心に映し出されたということは興味をひく。また春月はメレディスの詩を観念抒情詩としてとらえない。超個性的な概念で人生を把握するのではなく，生命感情のリズムを内蔵する詩人として，春月は愛誦したのである。

生田長江が，平塚明と心中未遂事件をひきおこして禁慎していた森田米松(明14～昭24，筆名二十五絃，白楊，草平）や朝日新聞に入社して小説を執筆していた中村蓊(明14～昭27，筆名胆駒古峡）と共に，一時期，夏目漱石のもとに出入りしていたことから，のちに大正期の教養主義の旗頭となった阿部次郎，小宮豊隆，鈴木三重吉といった木曜会グループの顔ぶれとも，春月は面識をもつようになった。

阿部次郎（明16～昭34）は，長江よりも1年おくれて，明治40年に東京帝大哲学科を卒業している。彼が漱石の門を最初にくぐったのは，明治42年のことである。明治44年に読売新聞の客員になったり，大正2年には慶応義塾大学講師となったりしている。そして大正3年4月には「三太郎の日記」を，翌年6月には「第弐三太郎の日記」を刊行した。また大正5年より，数年間，断続的に「アララギ」に「ゲーテ詩抄」を掲載している。この雑誌の読者でもあった春月は，阿部次郎訳のゲーテ「回心の女」を，自分の詞華集へ採用している。春月訳と並べて見てみよう。

回心の女

夕焼が輝く中を
ひっそりと森添(もりぞひ)行けば
ダモンさん，笛吹いてゐた，
その音は岩に響いて，
ソーラーラー

あの人は私をひきよせ
甘い佳い口つけをした，
私は云ふ——もっとお吹きよ，
若い衆は又笛吹いた，
ソーラーラー

その日から胸休みなく，
楽しみも何処へ行ったやら
わが耳に昔の音が
何時までも響き離れず，
ソーラーラ　　レーラーラなどと。

阿部次郎訳

物思はしくなった女

夕やけのかがやくころを
森ぞひにこっそり行くと
ダモンがすわって笛吹いてゐた
その音は岩に響いて
ソララ！

あの人はわたしを引き寄せて
甘い接吻してくれた
『もっとお吹き！』とわたしが言うと
いい若い衆はまた笛吹いた
ソララ！

それからは心の落着きなくなって
楽しい気持もなくなって
昔の音がいつまでも
耳についてはなれない
ソララ！　　レララ！

生田春月訳「ゲエテ詩集」(大8．11)

ところで，春月は大正4年6月の「新潮」に「阿部次郎氏を論ず」を掲載している。だが，もはやこれは人物批評と呼べるものではない。「兎に角『氏を論ず』と云ふやうな事は，到底私のやうな無学にして愚昧な者には企て及ばぬ事であって，畢竟するに，かの意味深きモナリサの微笑を氏の口角に泛ばしむると同時に，世の嗤笑を招くに過ぎぬであろう」と，自虐的なまでに，批判精神が萎縮し，批評家としての姿勢と客観化する距離のパースペクティヴを喪失している。そして，まず彼は阿部次郎の「緻密に分析する犀利な頭脳」[21]，「論理的な精練」[22]，「奔放なる才気」に圧倒され，やっと阿部次郎の「本来の独善主義」と「大いなる寂寥」を感知することにとどまっている。いかに春月が阿部次郎を尊敬しているとしても，この精神的萎縮は何に起因するのであろうか。何か負い目でも春月にあるのであろうか。

そのことが，前年3月に，徳島県坂野郡松島村大字泉谷に生まれて「青鞜」の同人であった西崎花世（明21～昭45，筆名長曾我部菊子）と結婚したことと関連しているのであろうか。ふたりが共同生活を始めた第1日に親友の加藤武雄，中村武羅夫，水守亀之助，中村詳一がお祝いにかけつけてくれた。その翌日には，師匠の生田長江が——あらかじめ妻の藤尾に紅いてがらと櫛と笄とを

祝いの品として贈らせていたが——阿部次郎と連れだって訪れてくれた。この訪問は，長江と春月との師弟関係からのみ，これまで考察されてきた。そして花世と阿部次郎との関係が全く看過されて来ている。

阿部次郎が，長江の斡旋で，一高以来の友である安倍能成たちとともに「青鞜」の主催する文芸研究会に講師として参加し，他方，花世は——阿部次郎の内面生活を直接記録した「三太郎の日記」と相通ずる——「感想」と称するジャンルを開拓し，赤裸な生活告白および仕事場の克明なルポルタージュを盛んに「青鞜」へ寄稿していた。そして花世は結婚する直前に「青鞜」に載せた一文「真をしたひて」（大3．3）に「この一文を阿部次郎先生の御手に寄す」とことわっており，さらに大正3年6月の「青鞜」に載った「結婚」を読むと，2月19日昼に記した「而してA——先生のお云ひになる『発育のカーブ』のために自分の生長を大切にしたいと思ひます。私は本当に先生のお世話になりました。……先生のところへ御礼にゆきたくてなりません……先生のおかげで私はかうして生きる術をおぼえましたから」[23]という個所，および生田長江夫妻を話題にした3月18日の記事「先生はA——先生と御一緒に，私たちの家のお客様となって下さる事となった」[24]という個所からも，「A——先生」を阿部次郎とみたしてよい。そして，また，この時期の花世が，阿部次郎に師事していた，と考えて差し支えない。

日々書きしるす生活記録ノートには，明治43年3月に上京してのちの生活苦，肉親への情愛，裏切った男への怨嗟，魅力のない女の自覚をもって生きゆく決意といったものが，克明に書きとめられていた。貧困と疲労の実感しか残らぬ生活の中にあっても，ノートに書きしるす作業は，「私一人の内面的な享楽でもありまた私一人のいとなみである」[25]。だが，彼女のノートの最大の目的は次の事にあった。「私の真の生きかたは私の周囲の人々の生きかたに対する観察と，この観察によっていい生き方を堀りあてやうとする創作とを私のノートに編み上げる事である。」[26] 彼女がノートの外に自らの存在理由はないとまで思いつめ，そのノートに基づいてつづった一文「恋愛及生活難に対して」は衷心より4歳年下の春月を感動さすほどの力をもっていた。これからが春月らしいところであるが，長江から無分別な性急さをいさめられながらも，先入見から，河井酔茗を介してプロポーズした。この前後については，「青鞜」の「真をしたひて」（大3．3），「得たる『いのち』」（大3．5），「結婚」（大3．6）に詳細に記されている。彼女は大正2年1月の長曽我部菊の筆名による「新らしい女の解説」以降，結婚するまでの15カ月の間に8篇の感想文を「青鞜」に寄稿した。

これは絶望の日々から，新しい愛を獲得するまでの時期であり，従って，この時点では，誇らしげに「感想は事実を生み，事実は感想を生み，苦痛は新しい苦痛となり，悦楽は更に意味ある悦楽となり，歩一歩身を進めて自分の理想を踏んで来ました[27]」と語ることが出来たのである。

ところで，ふたたび阿部次郎に対する春月の畏縮の姿勢へ話をもどせば，春月と花世が，ともに結婚の前後に世話になり，阿部次郎に頭があがらなかったのかもしれない。また春月が述べているごとく，阿部次郎の学識と人格とに畏敬の念がおさえがたかったのかもしれない。だが，それだけではない。自己の内面を確立せんとしながらも実現せず，いたずらに不安と悲哀にみちあふれる青年が「三太郎の日記」を読んだとき，その理想主義的求道精神にくらべて，いかに自らがその域に到達せず，自らが卑少であるか自覚させられ，しかも正真の自我の確立のため，自らを反語的対象とする真摯な精神的態度と激越な告白衝動を眼のあたりにするとき，圧倒され，かぎりない畏怖を感じるであろう。そして，このような感情から，春月も阿部次郎に対する人物月旦が全く不可能になったのではあるまいか。

阿部次郎の場合と異なり，小宮豊隆（明 17～昭 41）と春月との間の交流は全くないと言ってよい。小宮豊隆が明治 38 年に東京帝大独文科へ入学する際，従兄の紹介で夏目漱石に保証人になってもらったことからも，次第に漱石に魅了されて，本来受講すべきフローレンツの独文学講義には出席しないで，漱石の「文芸評論」とシェイクスピアの講読には出席した。そして，それにもあきたりず，明治 39 年 10 月 11 日から始まった木曜会には欠かさず出席した。明治 41 年に大学院へ進んだが，翌年には慶応義塾大学文学部講師となった。同年 11 月に漱石の発案で「朝日文芸欄」が創設されると，明治 44 年 10 月に廃止されるまで，編集に森田草平が従事し，小宮豊隆も阿部次郎や安倍能成とともに手伝った。その間，小宮豊隆は，漱石や森田草平の影響をうけて，露西亜文学への関心を高めて行った。このような事情のもとで，小宮豊隆が翻訳したフヨオドル・ソログウブの小品「平等」を散文詩とし，春月は採録している。

さて，ここで，あらためて雑誌「帝国文学」の歴史をふりかえってみよう。この雑誌は，「早稲田大学」に対抗して，帝国大学文科大学の教授と学生が手を携えて発起人となり，文学会を興して発行した機関誌である。それは明治 28 年 1 月のことである。この月刊文芸雑誌は論説，詞藻，雑録，文学史料，雑報からなっていた。そして詞藻欄に詩，短歌，小説，翻訳などが，また雑録欄に泰西の文学の紹介や評論が載った。雑誌の歴史は，3 つの時期にわけることが可

能である。第1期は，創刊時から明治38年まで，そしてこれにひきつづいて大正6年2月に一時休刊されるまでが第2期である。さらに8カ月後に復刊し，大正9年に廃刊となるまでを第3期と呼んでよい。第1期に学外から寄稿したものに，島崎藤村，与謝野鉄幹，泉鏡花，野口米次郎，石川啄木たちがいる。春月が誌上で活躍したのは，第2期である。春月が主任編集員小林愛雄の厚遇をうけた時期は，学内会員の創作欄への投稿が少なくなりはじめた時であるばかりでなく，浪漫主義が衰退し，自然主義が興って来た時であり，このような潮流に棹さす傾向が帝国文学会にあったことから，春月や中川一政のような学外の清新な浪漫主義的な詩人が起用されたのである。けれども，「白樺」や「新思潮」が創刊されるにつれ，「帝国文学」は次第に衰退していった。

上田敏たちともに第1期に活躍し，春月の詞華集へ収められた人物に晩翠土井林吉（明4～昭27）がおり，春月は彼を思想的抒情詩人のひとりに数え入れている。土井晩翠は，青年期に，泰西詩人ではバアンズ，ワアズワアス，バイロン，東洋詩人では屈原，李白，杜甫を愛好し，また自ら明治期の理想主義に燃えた英雄的感情を創作へ移した。そして明治32年の「天地有情」（博文館刊）では，35篇の創作詩のほか，附録としてカーライル，セレイ・ジョージ・サン，エマルソン，ユウゴオなどの詩人論，詩論の部分訳を添えている。春月は詩集「暁鐘」（明34.5，有千閣・佐藤書店）に収められた訳詩の中より，ユウゴオの「汀上の逍遙」を選び出したが，ユウゴオこそ，土井晩翠が15歳のとき，初めて，しかも心底より感動した泰西詩人にほかならなかった。その訳稿は，前年に二高の英語教授になったばかりの土井晩翠が「明星」（明33,10）に載せた初出の用字を一部改めたものである。春月は「汀上の逍遙」のうち第二と第四の「逍遙」を抜萃し，その数字を第一と第二へ付けかえている。

英文学者でありながら，漢籍の学殖をもつ土井晩翠とは対照的に，傑出した漢学者であって，外国文学に強い関心を寄せていた人物に天髄久保得二（明8－昭9）がいる。彼は赤門派の笹川臨風，大町桂月，武島羽衣等と並び称せられるほどの名文家であった。そして「帝国文学」「明星」ばかりでなく，自ら発行した「新文芸」に評論，紀行文，美文，漢詩を盛んに発表した。また，なるほど彼本来の文学業績は漢詩の領域であるけれども，泰西文学の翻訳を手広く企てている。明治37年7月には，文学士菊地行蔵とまだ独文科の学生であった橋本青雨の助力をえて，ゲエテの「エルテル」を金港堂より刊行し，これを春月も耽読した。春月は，彼の訳業のうち，「オシアンの詩」の一段落を自らの詞華集へ採っている。

他の文学領域でもめざましい業績を挙げたという意味では，国文学者の柴舟尾上八郎（明 9 ～昭 32）を忘れるわけに行かない。明治 34 年に帝大国文科を卒業すると，哲学館の講師となり，同年 11 月に新声社より「ハイネの詩」を出版した。のちに自らハイネ詩集を数度にわたり刊行した春月も，この一書を愛誦した。その思い出が，春月が詞華集へ収録した「輝きそむる朝の日に」の 1 篇である。しかし，そのうち，尾上柴舟の単調な 75 調の文語訳に不満をもち，流麗な 75 調ではハイネの皮肉な調子がくみとれず，とはいえ，自由詩のような散文調ではハイネの本領がうちこわされるということに気付き，その認識のうえにたって，春月はハイネの全抒情詩を翻訳するという偉業をなしとげたのである。尾上柴舟は，東京女高師の教授になった明治 38 年の「金帆」（明 38.6，本郷書院）にはハイネやシラーの訳詩を収めているが，独逸的要素を含むという意味では，詩歌集「銀鈴」（明 37.11，新声社）や「日本文学新史」（大 3 .11，弘道館）でも感知できる。さて，春月は，尾上柴舟の訳詩として，ハイネのほか，独逸詩人ウウラント「幼児の死に」と英国詩人ヰリアム・カウバア「若き貴女に」を採用しているが，この 2 篇は「明星」（明 36.11）に掲載された訳詩 4 篇の中から選びとられたものである。

春月がハイネ研究にうちこみはじめたとき，わが国で研究書と呼べるものは，青雨橋本忠夫（明 11～ ? ）の「詩人ハイネ」（明 36. 7 ，金港堂）しかなかった。明治 37 年に東京帝大独文科を卒業するのであるが，在学中より，達者な語学力と文章表現力で活躍し，上記の著作のほかに，美文小説と俳句を収めた「ほし草」（明 35，尚文館）を発表し，またシルレル，ハウプトマン，あるいはイプセンを「帝国文学」「新小説」「新声」といった諸雑誌に翻訳紹介していた。彼は，後年，三高や中央大学の教授となっているが，春月は彼の「ゲエテの詩」（明 36. 6 ，新潮社）の中で並べおかれている 2 篇「護符」「泣かしめよ」を選んでいる。この一書は，「泰西名詩名訳集」の翌月に「ゲエテ詩集」（大 8 . 5 ，新潮社）を刊行した春月が独逸語の自修にかって使用したものである。

護　　符

東洋も神のもの，
南北の国々は
唯一正義の大神は
百々（もも）の御名により

西洋も神のもの。
静かに休め，その御手にこそ。
人々平等の権を賜（つ）ふ。
崇めまつれよ，敬（うや）しみて。

橋本青雨は上田敏，三浦白水，石倉後凋の指導や補正をうけながら，Goethes lyrische Gedichte, erklärt von Dr. J. Heuwes (Schöninghs Ausgaben deutscher Klassiker), Ausgewählte Balladen Goethes (und Schillers) mit Erläuterungen von Dr. J. Heuwes,（同前），Düntzer : Goethes lyrische Gedichte erläutert,および Viehoff : Goethes Gedichte erläutert を使用して編んだ。これに対して，春月が使用したテキストは Reclam 版であり，この中の "Lieder" と "Aus Wilhelm Meister" のすべて，さらに "Vermischte Gedichte" の大部分，"Gesellige Lieder" "Balladen" "Epigrammatisch" の一半に加えて，"Chinesisch-Deutsche Jahres- und Tageszeiten" "Neugriechische liebe Skolien" の各 10 篇を添えた総計 203 篇である。従って，"West-Östliche Divan" に典拠する "Talismane" および "Laβ mich weinen" は春月の訳詩集には含まれていない。なお，春月は，解釈にあたっては，英語本の E. A. Bowring 訳や Astor 版を参考にしている。

ゲエテ詩は，橋本青雨の 2 篇のほか，すでに触れた森鷗外訳の「ミニヨンの歌」「弾弦者の詩」「マルガレエテの歌」「ツウレの王」や阿部次郎訳の「回心の女」に加えて，春月訳の「希望」「シチリヤ人の歌」「春が来て」「美」，さらに原青草訳の「貞操」，おぼろづきよ訳の「はじめてのうらみ」「旅人の夜の歌」「流れに」，塩釜天颱訳の「死児を弔ふ歌」が選ばれている。おわりの 3 人の訳は，いずれも明治期のものである。

原青草訳の「貞操」は明治 40 年 8 月の「明星」に，おぼろづきよ訳の「旅人の夜の歌」と「流れに」は明治 37 年 12 月の「明星」に掲載された。

貞　　操

君は語りぬ。「女のこころはここより
かしこへ移りて守るところなし」と。
責めざれ，友よ。女は常に，操かはらぬ
男を要(もと)むるなれば

原青草訳

流れに（第 1 聯）

忘らるる大わだつみに
流れていねよいとしき歌
一人の童も少女も，花時に
汝れを再び愛でうたはず。

おぼろづきよ訳

両者ともに，文語による直訳体で，訳語も正鵠を射るものと言いがたく，リズム上の音楽性も，いますこし難がある。

最後に挙げた人物に関しては，明治 38 年 9 月の「帝国文学」を見ると，独文科の瀬尾武次郎，塩崎健男，雪山俊夫，林久夫達と一緒に入会し，さらに明治 44 年 2 月の会員消息欄には，「文学士塩釜正吉氏（号天颱）は第四高等学校教授奉

職中病魔の犯すところとなり，去る十二月十二日金沢に永眠された」と，訃報が載っている。塩釜天颱は著書「ゲーテの詩研究」（明 43.3,博文館）でゲエテの詩作態度，その詩にあらわれた思想と感情，シルレルに及ぼした影響，またゲエテの民謡趣味等について論じているが，その中に「死児を弔ふ歌」を見出している。

菩提所や芝生繞りて　　緑の樹，すぐ立つほとり
天聳る樫のひと樹に　　風のこゑ，どよめくほとり

ここにこそ逝きしわが児の　　息ひぬれ，倉皇の運命
ここにこそ地より天にと　　誘ひぬれ，われらが眼を。

塩釜天颱は「帝国文学」の歴史から言えば，第 2 期に属している。同様に，彼より 3 カ月おくれて入会した独文科学生に蘆風吹田順助（明 16～昭 38）がいる。彼はゲエテ，ヘッベル，クライスト，ヘルデルリン，レナウ，ブランデス等に対する広範な研究をつづけて，沢山の著書をあらわしたが，それは昭和期に入ってからのことであり，明治期から大正期にかけては,「帝国文学」のほかに,「心の花」「芸苑」「白樺」などに詩，小説，戯曲等を発表している。春月が採録したドイツ民謡「いのちのランプの燃えるうちに」の訳者大津康と同じく，彼は明治 40 年に帝大独文科を卒業したあと，札幌農大予科，七高，山形高，東京商大，中央大などで教鞭をふるった。春月は明治 40 年 11 月の「帝国文学」に載ったノワリス「夜の讃歌」より，詩篇を抜萃している。同一作品から別の詩篇を，春月は出野青煙の訳より採用しているが，これは明治 40 年 1 月の「心の花」に収録されていたものである。詩句のリズム感において，吹田蘆風訳のものが秀でている。

春月の「泰西名詩名訳集」に収録された独逸詩の訳者をみると，第 2 期の帝国文学会の会員では，梧桐夏雄，山本禿坪，成瀬無極，茅野蕭々がいる。

梧桐夏雄（本名，五島駿吉，明治 40 年東京帝大独法卒業）は「明星」で長詩，美文小説，評論を多数寄稿しているばかりでなく,「帝国文学」にゴルキイやモーパッサン達の作品を翻訳している。逓信省の官吏となり，のちに実業界へ転じたこの人物の訳詩の中から，春月はアイヘンドルフの「大理石像」より 1 篇を採っている。だが，あまりにも星菫派に乱用された 57 調リズムで，単調さを覚える。

「大理石像より」

もろ人はつれそひたるにわれはしも
ひとりなるこそかなしけれ,
なつかしき人とあれども春淺み
思ひ出の夢にも入らず,
水の音の心なきごと
わが歌をききながすらし。

梧桐夏雄訳

批評家

そはげに真なり，啄木鳥(きつつき)の
しくじらざるよりもなほ批評家は失敗(しくじり)なけむ
いと凄まじき嵐にさへも解の木はゆるがず
その幹によりてこそ啄木鳥は小虫を拾ふなれ

山本禿坪訳

また山本禿坪は，「スバル」に数度にわたり訳詩を載せているが，明治44年9月の訳詩2篇のうち，デエメルの「批評家」が選ばれ，さらにヴェルレエヌの“Art Poetique”も添えられている。

ここで，春月と面識のあった2人のゲルマニスト成瀬無極と茅野蕭々に言及する必要がある。無極成瀬清（明17～昭33)は，一高時代に，吹田順助や小牧健夫と同級で，三羽烏に数えられていた。昭和40年に帝人独文科を卒業すると，慶応大予科で1年間教え，そのあと三高教授となり，また京大助教授を併任した。それに先だち，彼が「帝国文学」の編集員であった頃，彼は小林愛雄のもとを盛んに出入りする春月の存在を知った。明治末期から大正初期にかけて，小説・戯曲・詩の創作作品を発表したが，訳業は比較的すくなかったことから，ウェデキントの「郷愁」1篇しか春月に採録されていない。

苔蒼き石の上に
月かげにきらめきて

おもひ沈みつゝ我は坐せり。
過ぎ去りし昔をしのび,

浪の底深く
わが方を顧盻(かえりみ)しつゝ,

みなかってわが恋なりき
今この寂寞に

音たてゝ泉ぞおつる,
銀のごとく輝やけり。

泡だつ波を眺め,
来るべき日を夢みぬ。

さまざまの物こそ映れ,
過ぎゆく姿。

過ぎ去りし喜びなりき,
わが心の憧れ求むる。

これとは対象的に，春月は「泰西名詩名訳集」に，蕭々茅野儀太郎(明16～昭21)の作品は11篇も採用している。つまり，明治42年7月の「スバル」に載ったリリエンクロオンの「遅し」を筆頭に，デエメルの「いざなひ」「憂ある胸よ

り」「梨の若木の下」，リルケの「進歩」「追憶」「薔薇の咲き初める頃」「短章」，マリア・ヤニチェックの「火のをみな」，ホフマンスタアルの「経験」「早春」を採用している。茅野蕭々は一高に入学したとき，安倍能成・小宮豊隆・平野万里・斉藤茂吉達と同級であった。一高の一年生である明治36年3月に，暮雨の筆名で「明星」へ短歌を寄稿したことがきっかけとなり，平野万里とともに明星派の新進歌人として重視された。彼が蕭々という筆名へかえたのは明治37年8月の「帝国文学」に短詩「江碧愈白」からである。明治40年に，同派の閨秀歌人増田雅子と結婚し，その翌年7月の「明星」を見ると，「同人の動静中，平野万里君は工科大学を，茅野蕭々君は文科大学を，何れも卒業致され候」と載り，次号では「文学士茅野蕭々氏は京都第三高等学校へ来る9月より赴任のことに内定致し居り候」と記されている。三高の独逸語教授として赴任したが，中央での文学活動を願い，大正6年に東京へもどり，慶応大に移った。

新詩社の歌会の席で，春月は仲間の佐藤春夫・堀口大学・奥栄一達とともに茅野蕭々と顔をあわすことがあったが，仰ぎ見るような存在であった。茅野蕭々は，初めは繊細で温雅な，かつ内省的な短歌，詩，小説を創作していたが，やがて「明星」や「帝国文学」でも評論や翻訳を発表するようになった。けれども，ゲエテ，リルケ，浪漫主義者達に関する研究書を出版するようになったのは昭和期へ入ってからで，春月の「泰西名詩名訳集」が出版された頃は，「スバル」や「朱欒」の誌上に，現代独逸詩人の作品を翻訳紹介することにとどまっていた。後年，新潮社が企画した「世界文学全集」第37巻の「近代詩人集」（昭5．5）や「世界文学講座(7)独逸」（昭7．4）の編纂にあたっては，春月と茅野蕭々は協力し合っている。

日本における独逸文学研究が帝国大学文科大学の卒業生藤代禎輔（明24卒），管虎雄（同前），上田整次（明28卒），長江藤次郎（明29卒），登張信一郎（明30卒），青木昌吉（同前）といった人達によって拓かれて行ったとするならば，仏蘭西文学のアカデミックな研究は松井友樹（明32卒），吉田順吉（明33卒），上田俊一郎（同前）やこれから触れる折竹錫（明41卒），内藤濯（明43卒）達とともに始められた。

蓼峰折竹錫（明17～昭25）は5人目の仏文科卒業生で，三高教授，福岡高校長等を歴任した。その間，漸次，文学の創作活動から離れて行き，むしろ仏蘭西語教育へ傾注した。明治38年に入会した「帝国文学」で，わが国への象徴詩の移入や高踏派詩人の紹介に尽力したり，またある時は口語自由詩をめぐって相馬御風と論争したりした。

春月が主宰した投書雑誌に「文芸通報」がある。大正11年4月の同誌に秋山黄葉の「北方アフリカの民謡」という訳詩が掲げられているが，その訳者の素性が筆者には判明しなかった。この頃，春月は世界の民謡の収集と研究に，そして日本における新民謡の創造に熱中していた時期であるだけに，この雅号の人物の割り出しに苦労した。「帝国文学」をたまたま手にしたとき，秋山黄葉のペンネームで評論「仏蘭西詩壇過去壱百年」（明42.2）や作者不詳の訳詩「拾世紀に於ける回教人の遺詩」（明42.5）が掲載されており，ここで初めて，さがし求めていた人物こそ，R. T. O. または多音祐などの別号をもつ折竹錫であることが確認できた。そして春月が「帝国文学」の編集に携わっている小林愛雄の手伝いまでした時期[28]，折竹蓼峰も編集員で，春月と面識があり，春月が折竹蓼峰の作品を，その別号で，引用するに足るだけの背景があったことが確認できたのである。

ここで，その「北方アメリカの民謡」と並べて，「泰西名詩名訳集」に収められたルコント・ド・リイル「曙」とボオドレエル「万物照応」（「帝国文学」明41.1）のうち，後者を見てみよう。

北方アフリカの民謡

オアシスの樹陰に君は寝ねし夜ありや，
その曙，
苑より(その)のぼる薫りにこそ，
そが膚(はだ)の香(か)はたぐふべけれ。

若しや君，
日の光りに息づく
さうびの花を見しことなくば
その頬の輝きは説くにし足らじ。

亦若しや君
月の光を浴びて咲ける
百合の花見しことなくば，
如何で比(たぐ)へむそが素足の白さ。

君はまた，爽やかなる
葡萄の美
歯に涼しく嚙みしことありや，
さながらは接吻(くちづけ)の人の唇。

万物照応

偶々揺らぐ玉柱ゆらぐ命に
言霊(ことだま)は乱れて薫る「自然」の精舎(しようじや)，
辿り行く象徴の森の瞳の
かつ親しみの力草人は折りしく。

闇(くも)に陰(くうじやく)れる空寂(はて)の極しも知らに
遠谺(とおこだま)，反響(こだま)にひびく物のさびしさ
落つる夜かひたぶるの光の郷(さと)か
縺(こた)れ応(か)ふる物の香(ね)，色，音。

箪築楽(ひちりぎがく)のさゆらぎかあるは牧野(ぼくや)の
若草か，稚子(わくご)が肌の血の匂(あか)—
然らずば空華(たかおご)の高傲り悪にしづめる

千草の薫香(かおり)，亦琥珀，あるは蘭麝(らんじや)か，
極(はて)しらぬ物の力の満(みち)あふれ溢れて響く
霊の昂ぶり官能の刹那の戦慄(ふるひ)。
（「帝国文学明41.1）

若しや亦，君は，沙漠の深夜，
時としてきしりゆく
宿星の楽音聞きしことありや，
さながらはそが声音。

若しや君，
げにひとたびも，涙のしづく
恋に知らずば，夢な願ひそ。
吾が愛しき人はいかにと。
（十世紀の北方アフリカ回教人の唄）

折竹錫は，学生時代，実に頻繁に借家を移っている。明治40年8月頃から数カ月間は，千駄木町57番地に居住している。ところが，同年10月の「帝国文学」の入会員欄に，内藤濯（明16～昭52）の名前が見え，住所が上記の折竹方となっている。この若き2人の仏文学研究家がひとつ屋根のもとに居住し，親しく錬磨しあうという一事は，1篇の詩を共訳するという文学的エピソードをもたらした。明治41年10月の「帝国文学」で結晶した蓼峰・水翟共訳のアルベル・サマン「夢魔」は，2人の青春時代の共同の記念であり，さらにこれを春月は自らの詞華集へ採り入れている。

音楽―燻香―香油―毒薬―文学！
花ゆらぐ火照りの花園
燐の火か青く輝く瞳にアンドロジイヌぞ
微笑むは腐れゆく世の黄金の墳墓。

瓊音もゆらに緑照る黄金の衣，裳ゆららに，
「性」の外道へ飼料呉れむ……
肉の香の酸く新らしき，痙攣のふるひ高鳴り
責苦に削る楽欲の青びれし色，

斗オロンの魂血に滲む弓のきしめき，
ふと引返し背を反らす姿みよ，
苦悶の叫び，狂ほしき戦慄，斯かる技のゆゑか。

心惑ひの額にこそ，燃えつくせ白熱の烙印の色，
官能万歳！狂熱の神経万歳！
肉の外道ぞ訪らふは地獄の餓鬼ら……

時来たり。いざやアンドロジイヌへ，いざ。

ここで使用している水翟という筆号は，明治42年1月までしか使用されていない。「帝国文学」の編集委員になったのを機会に，濯の本名にもどし，また編集委員として批評文等を執筆するときには，水笛の筆号を使用している。春月は，恐らくこの間の事情を承知しながらも，「泰西名詩名訳集」の中では，出典に忠実に別人のごとく，2種類の筆名を踏襲している。つまり，水翟でマラルメ「顕現」を，濯でヴェルレエヌ「樹立の影」，フェルナン・グレエグ「十一月の戦慄」，アドルフ・ボショオ「晩鐘」，アルベエル・サマン「なやみ」，ヴェルハアレン「風車」「群衆」，メエテルリンク「畏怖」を採っている。これらは「帝国文学」ばかりでなく，文芸雑誌「詩歌」などからも選びだしたものである。彼が紹介したのは仏蘭西の近代詩ばかりではなく，ロマン・ローランの芸術と思想を鼓吹したり，小林愛雄が主宰する「音楽新報」にド・ビュッシーの解説を試みたりしている。

仏蘭西詩を翻訳したひとりに大貫晶川がいる。ゴオテイエの「支那少女」を訳した彼は，元来，仏蘭西文学が専門の人ではない。岡本かの子の実兄である晶川大貫雪之助（明20～大2）は東京府立一中時代より創作を始め，谷崎潤一郎と切磋琢磨し合い，明治39年に一高に入学すると，明治41年2月には小泉鉄や和辻哲郎達と文芸委員となり，同年12月の校友雑誌にゲエテの「小曲」を載せたのを皮切りに，同誌に初めて戯曲を発表したりした。またすでに明治39年10月には東京新詩社に加入して，自伝風の小説や象徴詩を寄稿したり，広範な文学活動をした。明治42年に東京帝大英文科に入学しても，雑誌「文庫」にツルゲーネフの翻訳や「帝国文学」に小説を発表していたが，明治43年9月には，谷崎潤一郎，小泉鉄，和辻哲郎達とはかり，第2次「新思潮」を創刊した。けれども，結婚後，生家が破産するという不運も重なり，次第に文学創作から遠ざかり，大学を卒業した翌年の2月に急逝した。そして，その5カ月後，新潮社よりツルゲーネフ「煙（スモーク）」が世に出た。

英米の詩の訳者に眼を転ずるならば，大貫晶川の先輩で，「帝国文学」第一期の終りに活躍した群像が眼につく。厨川白村，太田善男，松浦一，小原無絃といった人物群がいる。とりわけ，これら4人は春月がひとりで文学を研究し，英米詩について学習する際に使用した書籍の著者達であった。

とくに，春月に英米文学のみならず，泰西文学一般に開眼させてくれたひとりが白村厨川辰夫（明13～大12）で，彼の若き時代の主著「近代文学十講」（明45．大日本図書）と「文芸思潮論」（大2．同前）は春月の指導書であった。この英文学者は，明治37年に東京帝大英文科を卒業すると，しばらく大学院へ進

んだが，間もなく，英語教授として五高へ赴任し，さらに明治39年には三高へ移り，また上田敏の推薦で京都帝大の講師となった。大正4年に片脚切断の手術をうけ，その翌年に渡米した。春月の詞華集が刊行されたときには，すでに文学博士および教授になっていた。

彼の文名は，春月にはなじみのものであった。と言うのは，白村が明星派の短歌を愛好し，また創作のほか，英国浪漫派やヴィクトリア朝の詩の翻訳や評釈を「明星」で盛んに発表していたからである。白村は，京都府立一中5年生のとき，「学友会誌」に「E.. A. Poe」を早くもとりあげているが，春月も彼の業績のうち，明治37年1月の「明星」に掲載された「詩人ポーと其歌」の中より「ヘレンに」を取り出している。この訳稿は，のちに「厨川白村全集」第6巻（昭7．5，改造社）の「英詩選釈」に収められたものと異なっている。3聯からなる詩の第1聯のみをくらべてみよう。

うるはしきヘレンのきみは
いにしへのニケの小舟に似たりや，
静けく，うましかほりの波路をはるか
つかれやつれしたび人のせて，
ふるさとのはま辺にむかふ。
「明星」より

うるはしきヘレンのきみは，
似たるかな，いにしへのニケの小舟に。
静けくも，うましかをりの波路を，はるか，
つかれやつれてたび人のせて，
ふるさとの浜辺にむかふ。
「厨川白村全集」より

春月が採用した訳詩は，ほかに2篇あり，アアネスト・ドオソン「無題」とベルギーのシャルル・ワン・レルンベルグ「眠れる女」がある。後者は，明治38年6月の「明星」の「詩人ワン・レルベルグ」より，すべての感覚のうち，視覚へ強烈に祈え，形態と色彩を讃美する作品として取り出されたのである。

次に，太田善男（明13～ ？ ）は，一高で，生田長江よりも一級上で，小山内薫，川田順，武林無想庵達と「七人」を創刊し，活動した人物である。明治38年に帝大英文科を卒業し，当時隆盛を誇っていた博文館に5年間つとめ，ある時は，反自然主義の立場から，またある時は，新古典主義の立場から評論を書いたりしたが，のちに東京外語学校講師や慶応大予科教授となった。彼が書肆に勤めながら暮した「文学概論」（昭39．9，博文館）を使用して，春月が，文学一般を学んだことは確実である。そして春月が採録した彼の2篇の詩，つまり，バイロンの既興詩「友に答ふ」とシェレイの「悲しみ」が，彼の興味深い「文学概論」の中に収められているのも事実であるが，その表示と表現に異同があり，即座にそこからぬき出したものとは断定しがたい。

これに対して，太田善男と同期に英文科を卒業した松浦一（明14～昭41）訳のバアンズ「戸を開けてよ，オオ」，ホレエス・ホリ「酒場にて」，マクス・ウィイバア「殺那」，ワグネル「恋の死」そしてタゴオル「『園丁』より」は，疑いもなく，彼の「文学の本質」（大4．11，大日本図書株式会社）から引用されたことは明白である。のちに大正大，駒沢大，中央大の教授を歴任しているが，このユニークな文学概論の一書は，春月にとって有益な文学研究のテキストとなった。しかも，この「文学の本質」では，原詩が添えられていることから，これを利用して，大正5，6年頃，春月は翻訳を試みている。その成果が，春月訳で収められているワグネルの「水夫の歌」である。これと松浦一が平板に添えた大意とをくらべてみよう。

「トリスタンとイソルデ」より

西を眺めて，東の
方に，船は行くぞ
い。爽かに風は故
郷へ吹いて行く。
和蘭の嬢様や，何
処にあなたは居る
ぞいの。帆に吹き
つけて呉れるのは，
あなたの吐息の風
かしら。風は吹け
吹け，嬢様は吐息
つけつけ。愛蘭の
嬢様，嘆き狂ふた
可愛いい嬢様。

松浦一訳

水夫の歌

西のかなたに
眼（まなこ）はむかふ
東のかなたに
船ははしる。
さわやかに風は吹きすぐ
故郷のかなたへ
我が愛蘭の子
なれは何処にとどまれる？
こはなれがつく吐息なるか
我が帆をかくもふくらますは？
吹け，吹け，風よ！—
吹け，ああ吹け，我がよき子よ！—
愛蘭の少女，
汝荒き，やさしき少女よ！

春月訳

英詩に親しみ，勉強したという意味では，無絃小原要逸（明治37．東京帝大国文科卒）の多数の訳詩集がある。だが，春月は，それらのうち，「シエレーの詩」（明39．1，東亜堂書房）より3篇「秋」「——に与ふ」「断篇」しか採っていない。

——に与ふ

かすかなる声は死ぬとも
底ふかくふるひ行くかな。
花の香は袖にのこりて
絃（いと）の音（ね）は人のこころの
美しき菫病むとも
なかなかに消え失せぬかな。

花薔薇の花枯れつるも　　薔薇の葉は恋しき人の
床なして落ち積りたり。　　をりや，君，君きつるも，
ただ君をおもひ出づれば　　「恋」の上に眠れるここち。

彼の単調な57のリズムと古風で凡庸な表現は，長い詩句になると，相乗して，平板な印象しか与えかねないこともある。けれども，この訳詩集が，春月に不幸な詩人シェレイの文学世界を開示した功績は，軽視するわけにゆかない。なぜなら，晩年になるほど，のちに海に自らの生命を抛擲した春月は，思想的に親しく，イタリアのスペツィア湾で溺死したシェレイに共感を覚えて行ったからである。帝国文学会の会員でありながらも，小原無絃の作品はほとんど全く機関紙「帝国文学」に掲載されず，むしろ「明星」に彼の訳したユーゴー，ブラウニング夫人，エリオット達の詩が掲載され，奇異な印象を与える。なお，小原無絃は，生田花世とともに「青鞜」で活動した歌人原阿佐緒に，日本女子美術学校で英語を教えたこともあるが，春月の泰西詞華集があらわれた時期には，京華中学校につとめていた。

これまで見て来たことでわかるごとく，（折竹蓼峰，内藤濯，松浦一，太田善男といった少数の例外があるけれども）森鷗外，上田敏，夏目漱石をはじめ，土井晩翠，久保天髓，尾上柴舟，橋本青雨，厨川白村，小原無絃，小林愛雄，生田長江，栗原古城，梧桐夏雄，阿部次郎，成瀬無極，茅野蕭々，大貫晶川といった赤門派の文人は，いずれも「明星」の創作・評論・翻訳紹介の欄をにぎやかに飾った人達でもある。だが，勿論，後世に威名を残した人達もおれば，今日すっかり忘れ去られた人達もいる。例えば，明治38年に英文科を卒業した水上斉や高田知一郎，また大正2年に法学部（仏法）を卒業した栗山茂は，後者にあたる。しかも，彼等に共通な事柄は，小原無絃の場合と同じく，帝国文学会会員でありながらも，主要発表機関が新詩社の「明星」であることである。

まず，夕波水上斉は，在学中に，「帝国文学」の誌上で，シェレイやバアンズ等の訳詩を寄稿しているが，むしろ彼の創作と翻訳を中心とする活動の場は「明星」であった。事実，春月が採用した彼の訳詩であるキイツ「おもひたまうな」も明治37年11月の「明星」に載ったものである。しかも，「おもひたまふな，さばかりに――／涙なそそぎそ，はしき君，／深きといきはつくとても，／そはいづこへか放ちやれ」というように，75調の感情過多の文語からなる訳出表現で，いかにも明星派好みのものである。だが，春月のアンソロジーが出版された頃には，天台宗大学実践女学校に在職し，文筆活動から疎遠になっている。

次に，水上夕波と同期で，のちに報知新聞に就職した高田知一郎が，その活動時期を考慮するとき，主として「明星」で新体詩，散文詩，さらにテニソンやコレッヂの訳詩を盛んに発表していた高田梨雨とみなしてよい。明治36年6号に収められている彼の訳したシェレイ「寂寞」を春月は採用し，漢詩の興趣を思わす簡潔で，かつ余韻の深みをもつ訳業を愛している。

やもめの鳥，夫(つま)を悼みて　　冬枯の枝にあり。
上に朔風這ひ，　　下に寒流。

枯山(からやま)に葉ひとつ，　　地に花ひとつなく，
水車の響措きては　　大気更に動かず。

さらに，栗山茂は，明治39年に一高へ入学してから，創作活動に夢中になり，初めは「明星」に，のちに「帝国文学」に長詩や訳詩を投稿した。「明星」の終刊後，新詩社ゆかりの文人が集まり，文芸雑誌「すばる」(明42．9—大2．12) を発行して，耽美派の人々を結集しようとした。その際，第1号は平野万里，第2号は石川啄木，第3号は木下杢太郎，第4号は吉井勇，そして第5号は，東京帝大へ入学して間もない栗山茂が，弁護士の平出修と一緒に編集に携っている。そして「すばる」が終刊となった大正2年に大学を卒業すると，外交官となり，外地生活を送るようになった。彼の訳詩の中から，春月はイエエツの「水の音」を選んでいる。3聯の詩より，第1聯のみを引用してみよう。

立(たち)て我いざゆかむ，行かむ我，イニスフリイに
埴土(はに)をもて細枝(さえだ)もてむすびなむ，庵(いほり)を其処(そこ)に
九つの豆の畦(うね)，蜂蜜の巣つくり，其処に
我すまめ，ただひとり，蜂の音の高き森なか。

春月は栗山茂の情感の豊かさと繊細な表現力を評価している。

これまで春月編「泰西名詩名訳集」の訳詩者達の経歴を調べることにより，その3分の1が赤門の出身者であり，しかもその詩稿の出典を吟味することにより，それらの人々の大部分が与謝野寛の「明星」と関係していることが判明する。「明星」の清規の冒頭で掲げられた「文学，美術の上に，最も進歩したる思想，形式，趣味を慕ふもの，愛するもの，楽むもの，研究するもの，賛助するもの，これらに就て一致せる同人の結合を新詩社と名づく」という趣旨に最も近い距離にいたのが，一高生・帝大生そして新進の学士達であった。新しき時代の新しき短歌と新体詩のために，与謝野寛は未熟な一高生徒にも紙数を割

いたのである。このことは，明治41年7月「明星」の「同人の動静中，平野万里君は工科大学を，茅野蕭々君は文科大学独文科を，何れも卒業致され候。夏季休暇の間，栗山茂君は北海道に帰省……大貫晶川君は神奈川県に帰省……され候」という記事ひとつからでも，いかに与謝野寛が，2年生に在学する2人の一高生をふくめて，文才のある若き学徒を大切に育成しようとしたか，見てとれる。

これまで見て来た訳者の中には，明治34年に三高を卒業した厨川白村，一高の受験に失敗し，翌年出来たばかりの四高に入学し，明治36年に一期生として卒業した小林愛雄，また明治33年に若月保行や鮎川義介と一緒に山口高校を卒業した小原無絃のようなものもいるが，訳者の大多数は一高の出身者で占められている。いま，文科にかぎって，明治31年以降，明治45年までの一高卒業生名簿を調べるならば，明治31年に尾上八郎がいる。そして，この時代には卒業生名簿の順序が，成績順になっており，23名のうち尾上八郎は4番におかれている。明治35年の33名の卒業生の中に，松浦一（8番），太田善男（17番）そして水上斉（31番）の名前がある。45名の文科卒業生をもった明治36年には，五島駿吉（14番），栗原元吉（25番），生田孝治（32番）がいる。明治37年の27名の上位に，成瀬清（1番），吹田順助（2番），阿部次郎（3番）の名前が並び，翌38年の24名の名列でも，その初めの方に，折竹錫（1番），小宮豊隆（4番），茅野儀太郎（5番）の名前が見つかる。明治42年の20名の中に大貫雪之助（10番）と「白樺」の執筆者で触れる予定の小泉鉄（16番）がいる。因みに，この年の仏法志望者（26名）の中で栗山茂は3番，また明治44年の仏法志望者（37名）の名簿内で見つかった柳沢健は6番である。それは兎も角，春月がこれら一高生や赤門派の人々の作物を多数採り上げた背後には，彼が庇護をうけた生田長江が一高，東京帝大で学んだことと無関係でなく，生田長江の学友および先輩や後輩の発表した著作や雑誌が身辺にとりまいていたことを裏書きしている。

ふたたび，話を「明星」にもどせば，ただ単に与謝野寛は一高生や帝大生を重用したのではない。新しい詩歌の時代を希求する与謝野寛のもとに，若くて有為の英才が群がり，与謝野寛も，それに応えて，その英才を育成しようと願った結果にほかならない。生田長江も，星郊，星下郊人または無名氏と称して19種の作物を「明星」に発表しているが，まさしく，この時代が彼の文筆活動の揺籃期であった。彼はすでに新詩社に加入していた栗原古城を通じて，明治35年，つまり一高の2年生のとき，親友の森田米松（筆名，二十五絃，白楊，草

平）や川下喜一（筆名，江村）達と一緒に与謝野鉄幹の門をくぐっている。それどころか，明治37年に寛と改名した与謝野鉄幹の天才性を身近かより観察し，その秘密を解明じようとしたのか，明治40年に結婚すると，千駄ケ谷の与謝野夫妻の隣家で新居をもち，翌年，千駄木林町に移転するまで，すごしている。

詩人の育成という視点に立ったときにのみ，優秀な学徒と並んで，なぜ「明星」の誌上で蒲原有明と薄田泣菫が厚遇されたかが，自明のこととして，理解できるようになる。ここでは，蒲原有明（明9～昭27）についてのみ見てみよう。

「明星」第1号（明治33．4）に掲載された詩「菫の歌」から，終刊号（明41．11）の詩「雨・白い雲」にいたるまで，蒲原有明の長詩・訳詩・美文・比評文が多数発表されている。そして「明星」の寿命と蒲原有明の詩人としての生命とが，ほぼ一致するのである。つまり，初期の「明星」に寄稿した作品をふくむ情緒に波打つ「草わかば」（明35．1，新声社）に始まり，明治34年11月の「明星」収録の長詩で使用した題名と同じく，ロセッティイの影響を濃厚に映して知的情趣に富む「独絃哀歌」（明36．5，白鳩社）や「春鳥集」（明38．7，本郷書院）を経て，象徴詩を収めた「有明集」（明41．1，易風社）で詩人としての活動を終えている。

蒲原有明の外国詩に関する素要を見るとき，「新体詩抄」を再録した「新体詩歌集」中の訳詩に親しむことから始まっている。そして森鷗外の「於母影」を愛読し，東京府立尋常中学校を終えたあと，文学研究のため，外国語学習の必要を痛感し，国民英学会に通い，校長磯辺弥一郎のシェイクスピアや高橋五郎のバイロンの講義を聞いて，英文学への関心を深めた。そして，さらに，原書でキイツ，シェレイ，ロセッティイを読み，また上田敏編纂の英詩選“The Victorian Lyre”でスヰンバアン，キプリング，オマア・カイアムを知るようになった。明治30年には，これらの詩人の反訳やヴェルレエヌの英訳本からの重訳に熱中した。大正11年の「有明詩集」では，これらの改訳や仏欄西の諸詩人の新訳を加えている。

蒲原有明がダンテ・ガブリエル・ロセッティイのソネットやバラッドから感化を受けたことは，春月が明治41年9月の「新潮」に載った「画讃」，さらに「小曲」を選ぶことでも示される。

小　　曲

緑の草の中にしも腕を君が擲けやれば，
を指の尖のほの透きてあからむ花を擬ふかな
さても微笑むやさ眼や。散りては更に寄せ来なる
雲の波だつ空の下に照りては陰る牧の原。
二人巣籠るこの辺眼路のかぎりはおしなべて
黄金の花の毛莨，野末の線は白銀に
いぬ芹生ふる山査子の垣根の端に連なりぬ。
げに静けさの眼にみえて，漏刻の如しめやかに。

日影も忍ぶ草がくれ，蜻蛉はひとりみ空より
解けにし藍の一ずちの糸かとばかりかかりたる
「時」の翅もさながらに二人の上に休らひぬ。
噫，うち寄せむ，胸と胸，これや変らぬ珍宝，
美し契の濃やかにたとしへもなきこの刻，
二重に合へる静けさぞ君と我との愛の歌。

また明治35年6月の「明星」の改題誌「白百合」第1号に掲げられたクリスティナ・ロセッティイ「海の墓」を，同年10月の「明星」からキイツのバラッド「情しらぬ手弱女の曲」を，また明治39年2月の同誌からキリアム・ブレイク「蒼蠅の歌」を選び，さらにボオドレエル「貧者の眼」とオマア・カイヤム「ルバイヤット」より1篇を加えて，春月は詞華集に載せている。春月が蒲原有明の訳詩を7篇採用したということは，泣菫の絶句と対照的に，有明の清新なソネットに強く心動かされ，ある時期，有明の影響下にあったあかしでもある。しかし理念が過剰で，生色の衰退した有明から，春月は次第に離れて行き，それどころか，明治42年頃，「新潮」の詩欄の選者となっていた有明に対して，意識過剰となり，反発すら覚えている。だが，投書少年としては著名であっても，まだ本格的な詩人として詩壇から評価をうけていなかった大正のはじめ，春月は詩稿を抱いては，文豪文人の門を叩き，発表誌の紹介を依頼して回ったことがある。蒲原有明と面接した日のことを，後年，次のように回想している。「その頃の大詩人蒲原有明氏をおたづねした時，氏が庭の石燈籠を指して，詩術の堂奥を示し，木下杢太郎氏を極力推賞して，大に都会情調の詩を鼓吹された日のことは忘れられない。[29]」

春月は，蒲原有明のように，その才幹を与謝野寛から愛でられるということはなかったが，明治43年前後には，新詩社に出入りして，彼の和歌指導をうけている。それは生田長江の縁につながるものであった。生田長江が与謝野邸の

隣家から千駄木林町193番地へ転出したのは，明治41年8月のことであったが，交際はあいかわらず続いていた。この頃，生田長江は成美女学校で教鞭をとりながら，万朝報の記者をつとめ，なおかつ毎週金曜日には，英語を教授するため，与謝野夫妻を訪ねていた。他方，春月は，9月中旬に，初めて生田長江宅を訪問し，11月4日に正式に玄関番となった。明治41年12月26日の春月が記入した日記を見ると，与謝野家の女中が子供をつれ，歳暮の品として鶏卵1箱と蜀葡酒一対を持参している。そして明治42年1月6日に年賀に訪問した与謝野寛を間近で見て，多年あこがれて来た人物の印象を，次のように日記の中で述べている。「仲々立派な人だ。成程どっか『彗星』でも作りさうな人だ。」この讃美の言葉は，日頃，すでに生田長江が与謝野寛に対する性格批判を加え，それを春月に聞かせていただけに，対極をなす感想と言えよう。

生田長江が与謝野寛に対してどのような非難を行っているか，その一例を，明治42年8月中旬に，生田長江が石井柏亭と一緒に，与謝野寛に誘われ，紀州へ講演旅行へ出かけ，まだ新宮中学校の生徒であった佐藤春夫と出会う5日前の手紙で見てみよう。それは8月16日夜，紀伊国木の本酒甚より，生田長江は，山陰へ帰郷している春月へ宛てて，次のように書いている。「与謝野寛は悪人ではないが，いやな男である。晶子女史の小説が拙いのも故あるかなと思ふ。一葉女史ならば，どんな事があってもあんな男に惚れはしまい。」これだけ読んでも，いかなる理由で，与謝野寛が「いやな男」なのか書きしるされていないので，わからず，またそれが妻君の小説の出来映えとどんな関係があるのか，合点が行かない。もしかすれば，不便な長旅の中で，小さい不快な出来事が重なり，それを与謝野寛の人格的な欠点と結びつけることから発言された非難であろうか。

その問題は，ひとまずおいて，春月はこの年の11月初旬にふたたび上京を果し，生田長江の玄関番をつづけた。すると同月下旬に佐藤春夫が上京し，数日間，生田長江の食客となったので，春月は同年令の春夫を連れて，市中を案内し，また枕を並べて寝た。翌年の春，ふたたび上京してきた春夫は一高受験を口実に生田長江宅に逗留し，結局，慶応義塾大学予科に入学した。そして，生田長江の紹介で，春夫をはじめ，堀口大学，奥栄一達と連れだって，与謝野宅で開かれる歌に出席した。春月のそのような折の記念が，明治43年1月の「スバル」に掲載された「千夜集」や同誌に掲載された同年5月および11月の短歌である。そして忘れがたい彼の思い出のひとつは，「スバル」終刊号（大2．12）に彼が愛好してやまないニイチエ詩「秋」を翻訳して掲載することができたこ

とであった。ふりかえって，第一次「明星」に1篇の新体詩も1首の短歌も掲載してもらうことが出来ず，痛恨事であったが，第二次「明星」（大10．11～昭2．4）が与謝野寛の手によって復刊されると，依頼に応えて，早速，翌月の同誌のために，詩「霧」をおくり，以後，3篇の作物を寄せている。

さて，翻訳者としての与謝野寛に話を移してみよう。春月が，文章学院での収入がふえたことで，神田の夜学で独逸語の勉強をやっとはじめた頃，即ち，明治44年11月に，与謝野寛は単身で仏蘭西のパリへ行き，モンマルトルに住んだ。翌年，晶子が訪欧して来たのを機会に，諸国を見てまわり，そのあと晶子をひとり先に帰国させ，彼自らは，大正2年1月に帰朝した。そして翌年に晶子と共著の「巴里より」（大3．5，金尾文渕堂）のほか，訳詩集「リラの花」（大3．11，東雲堂）を出版した。この訳詩集は，渡欧後の明治45年3月より「スバル」「三田文学」「早稲田文学」「文学世界」「新日本」「朱楽」「白樺」「学生」「中学生世界」といった雑誌にひろしの名前で発表された訳詩をもとに216篇を編んだものである。自序によれば，「『リラの花』と名づけたのは，珈琲店（キャツフエ）クロズリイ・デ・リラの一隅で読んだ詩を多く収めて居るからの記念で[30]」，また訳詩の8割までが，滞仏中，語学研修のため，特に感興深いもののみを訳したもので，残りは，帰国後，逐語訳を心がけたものである。その精選にあたっては，最初，仏蘭西の青年詩人の助けをかりたり，雑誌の批評や世評を参考にして，1810年代のマリネッティ，サンドラルス，サン＝ポワン，パラツチエシイなど仏伊の未来派や若くして悲痛な詩を書くジャンニイヌ・ヴァド女史やルイ・アウグマアルを採っている。この「リラの花」は，「海潮音」と「珊瑚集」とのはざまで，今日，影がうすれがちであるが，春月は「最近の新しい詩人たちの珍しい作が多く，その内容の豊富な事に於ては訳詩集第一等である。加ふるに氏の詩人としての比類なき技巧の才はその異常の苦心によって益々輝いてゐる」と，評価する。そして彼はノワイユ伯爵夫人「永日」，アンリイ・レニエエ「書」「手の絵」，ヴェルハアレン「熱情の少女」「情人」，メエテルリンク「冬のおもひ」「倦怠の輪舞歌」，ダンヌンチョ「小曲」「無聊」，マリネッティイ「自動車競走」よりの10篇を選び出している。

手　の　絵

「時」は永久（とこしえ）に忘却の中へ，彼等の
先生せし脣より洩れし微笑（ほほえみ）を塗抹（ぬりけ）せども，
また「時」の気紛れは，彼等の手の静止せる形を
蒼白きパステルに永らへしめたり。

或手は自ら摘みし撫子の花を猶持てり。
母達の手，少女達の手，恋する女達の手，
共に，平和のために温かく，期待のために熱かりし手は，
その華やかなる姿と，美くしき側面とを見せて曲り，

血石(サンギイヌ)の目立つ黄なる紙の上に，
いろいろの手の嬲やかなる花束は
彩れる爪の匂はしき，白き指を開きぬ。

さて，是等の手が，曾て，時計の文学板(カドラン)の
刻(こく)を進め時を遂ふ針に，待ち倦(あぐ)みつつ触れしか，
はた忙しげに触れしかを誰か知らん。

パリ滞在中に，アンリ・レニエエ，ヴェルハアレン，パウル・フォルル，ギラウム・アポリネル，マリネッティ達と面談したり，最新作を味読しているうちに，与謝野寛は，一方で，ヴェルハアレンやマリネッティイの詩を優者の芸術として崇拝しながらも，親しめず，また他方，上に引用した優婉で熱烈なノワイユ伯爵夫人，高雅なレエニエなどの詩はなつかしいと思うだけで，異質な世界の消息のように思えた。彼が共鳴したのは，自らの傷痕を見る思いがする時代おくれのデカダンス派であり，パリを去る直前には，人生派や未来派の思想に心ひかれている。

これらのことを考慮するとすれば，春月の選択に誤りがあったのであろうか。そうとは言えない。与謝野寛の発言が，たとえ真実であろうとも，それはある時点の趣向と感情の震幅の極点にあるにすぎず，詞華集を編むことになれば，個人のあまりにも主観的すぎる趣味からはなれ，美のひろい世界の多様性を展示する必要がある。だから，与謝野寛も，その真の共感を覚える作品に限定するのではなく，実際には，訳詩集の中で，マリネッティイこそ1篇であるが，レエニエを最も多い22篇，ヴェルハアレンを次に多い18篇，そしてノワノユ夫人を6篇も収録しているのである。ましてや，春月が，与謝野寛のそうした心情や傾向について知識をもつことなく，自らの詞華集を編んでも，誤りではない。またその知識をもっていても，それに拘束されず，万人のための普遍的で広範な訳詩と訳者を，自分の詞華集のために集めればよかったのである。それをはなれても，春月は訳詩者としての与謝野寛の業績を正当に評価し，今日までそれを伝えたひとりだと言える。それを伝えた「泰西名詩名訳集」が発刊された大正8年には，与謝野寛は慶応大学教授となっている。

慶応大学教授ということに関連して，彼の前に，森鷗外と上田敏の推薦で，

明治43年4月より大正5年3月まで——丁度，佐藤春夫が在学していた時期と一致するが——在職していた荷風永井壮吉（昭12－昭37）のことが思い起される。

洋行帰りの父親の勧めで，永井荷風は明治36年に渡米し，さらに仏蘭西へ移った。仏蘭西文学への憧れは，明治34年，英語でゾラに接した頃にはじまり，それに次いでモーパッサンを原文で読みたいがため，暁星中学の夜学で仏蘭西語を学んだほどである。荷風は明治41年7月に帰国すると，すでに渡仏直後から執筆していた「あめりか物語」（明41．8，博文館）についで，「ふらんす物語」（明42．3，博文館）を発表したが，後者は発禁処分をうけた。一方，この時期の永井荷風に対する春月の感激は並大抵ではなく，力強い味方を獲得した心地であった。春月の日記を見ると，明治41年12月2日に「趣味の荷風氏『紅燈集』をよむ。実によし。実によし。我等の行くべき道はこれのみ」と記入し，また同月21日には，「芸術家と云ふ一種違った人格を持ってゐなくてはならぬ」という荷風の芸術家観に共鳴したり，同月28日には，「秀才文壇」に掲載された荷風の「悪感」を読んで，「相変らず，読んでしまうのが惜しいような気がする」と感想をもらしたり，その翌日には，また荷風の「狐」に感服したりしている。西欧の教養と日本の家族制度下での孤立感が，荷風の洗練された美意識をますます研ぎ澄ませ，春月を圧倒し，魅了したのである。日頃，無口でおとなしい春月は，内面的には激し易く，好憎の強い人間であった。明治41年12月20日の日記を読むと，愛好する文人として，荷風を筆頭に，敏，泣菫，魯庵，風葉，青果，漱石，泡鳴，未明，二葉亭，秋声等の名前が列挙してあるのに対し，嫌悪を覚える文人には，軽蔑的な動物名称で，次のように呼んでいる。「藤村（猫）白鳥（なめくじ）長田木城（ゲヂゲヂ）花袋（芋虫）長谷川天溪（牛）藤井白雲（糞蠅）島村抱月（蚯蚓）御風（かまきり）徳田秋江（ケラ）服部嘉香（毛虫）人見東明（油虫）これ等は皆いやな奴也」と，自然主義の旗印のもとに結集した者達を忌避しているのである。その点，日本の文壇をおおう無味乾燥の自然主義の暗雲に風穴をあけた人物として荷風を春月は歓迎したのである。ところで，良家の美風に対する反逆と人生の逸楽を肯定する耽美主義がこの期の荷風を動かす力学であった。だが，生涯で最も意欲的に創作をした時期であったが，「狐」をはじめとする短篇小説を収めた「歓楽」（明42．9，易風社）も，発禁となってしまった。このような発禁の圧力のもとで，荷風に江戸時代の戯作者的姿勢と花柳界趣味が，やがて色濃くあらわれくる。しかし，それに先だち，近代仏蘭西の文芸思潮を鼓吹しようと企てたのが翻訳

詩・評論集「珊瑚集」(大2．4，籾山書店）である。

春月の荷風に対する特別の愛着は，処女詩集「霊魂の秋」(大6．12，新潮社）の表紙裏の扉に掲げた荷風訳のシャアル・ゲランの詩句でも示される。これには題名が欠けているが，春月の「泰西名詩名訳集」をひもとけば，次にあげる8行詩「ありやなしや」の終り4行が引用されていることに気付く。

よし反響のきかれずとも，物には凡て随ふ影あり。
夜来(よるきた)れば泉は星の鏡となり，
貧しきものも人の悪に逢(つい)ひぬべし。
澄みて悲しき笛の音に土壇(ど)は立て反響を伝へ
歌ふ小鳥は小鳥をさそひて歌はしめ，
芦の葉は芦の葉にゆすられて打顫ふ。
憂ひは深きわが胸の叫びに答へん人心，
ああ，そはありやなしや。

荷風の訳詩が使用されているのは，彼の詩集ばかりでなく，彼が心血をそそいで執筆した自伝的要素の濃厚な小説「相寄る魂」(大10．9，－13．1，新潮社）でも見つかる。その第1巻「二つの湖水」ではポオル・ヴェルレエン「ましろの月」の第2聯を，第2巻「大都会にて」では同一詩人の「夜の小鳥」の終り4行を，第3巻「都会の黄昏」ではアア・エフ・エロオル「秋のいたましき笛」の第4聯を，そして第4巻「裏日本の秋」ではシヤアル・ボオドレエル「秋の歌2」の第3聯を，それぞれの扉頁に引用している。

春月が使用した上記5篇の訳詩は，いずれも「珊瑚集」に収録されている。だが，「夜の小鳥」のみは，春月編「泰西名詩名訳集」にはふくまれていない。また，逆に，「泰西名詩名訳集」に入って，「珊瑚集」に加えられていないものにミユッス「思い出よ」とレニエエ「経験」の2篇がある。なお，上に挙げた訳詩のほかに，ボオドレエル「無題」「死のよろこび」「仇敵」，ヴェルレエヌ「ぴあの」，ランボオ「そぞろあるき」，ゲラン「道のはづれに」，メリル「夏の夜の井戸」，レニエエ「秋」「正午」を「珊瑚集」から春月は採り，合計15篇に達する。ところが，ここで疑問がひとつ生じる。果して，春月が「珊瑚集」そのものの中から抜萃したのであろうか，という疑問が生じる。明治42年1月の「スバル」にレニエエの「秋」を掲載して以来，大正2年にかけて「新古文林」「女子文壇」「三田文学」「読売新聞」に発表して来た作品41篇をまとめて，「珊瑚集」へ収めたのであるが，初出の訳稿に推敲を加えて収めたためか，春月の詞華集と部分的に表現が違うものもある。それにもまして，「珊瑚集」で，「偶成」の

表題が与えられているヴェルレエヌ詩が，初出の雑誌「スバル」（明 42．9）および春月の「泰西名詩名訳集」では「無題」として掲載されていることである。これらの事実から，春月が一部作品に「珊瑚集」を使用した可能性は残っているけれども，主として，明治 42 年に発表された訳詩を採っていることをあわせて，春月は荷風の反訳を諸雑誌から書き抜いたと考えるのが至当である。究極的に，春月は荷風の訳業を次のように評価する。「永井氏は天成の詩人で，且つ言葉の魔術師だけに其訳詩は独特の味ひを有している。その文学の霊活なるその格調の高雅なる共に及び難きものがある。[31]」

ところで，小宮豊隆達に次いで，明治 43 年に新進の人気作家永井荷風を文学部教授に招聘したのは，人事の刷新とともに，機関紙「三田文学」（明 43．5－大 14．3）の発行に携わらすためであった。彼が編集する「三田文学」は，今や，反自然主義の砦となり，「スバル」「新思潮」に拠った人達や泉鏡花たち耽美派も寄稿することになったが，他方，荷風のほか，「文学界」のロマンティシズムをつたえる馬場孤蝶や戸川秋骨たちに心ひかれて，若い佐藤春夫と堀口大学が慶応大学予科へ入学した。

春月は，「泰西名詩名訳集」の序の中で，片山伸のテニソンの訳，西条八十のシングの訳とともに，佐藤春夫のワイルドの訳を，名訳ながら，収録できなかった，と残念がり，次のように理由を説明している。「一には私のその大切なる三冊のノオトの一部分が失はれてゐたため，一には本集を編するに多くの時日を借して貰へなかった為め，その雑誌の図書館はもとより，訳者自身の手元にさへ無かったりした為め，つひに惜むべき宝を逸し去った……[32]」その「惜むべき宝」のひとつとは佐藤春夫訳「キイツの艶書の競売に附せらるるとき（オスカア・ワイルド）」であり，明治 44 年 8 月の「三田文学」に掲載された作品である。

これはこれ悉（ことごと）くエンデイミオンが
別れ居て心ひそかに愛したるものにかきし文。
今羅市の喧騒は
あさましく垢づきし各（おのおの）の紙幣もとりたてます。
げにや詩人が熱情の一つ一つの脈動に
あきうどの評価を呼ばふ。かの輩は芸術を愛せず
かの輩は詩人の心の宝石を打ち砕き
これによりて小さく且つ病める眼を得意げにかがやかすなり。

聞かずや，そのむかし
遠き東方のある町に，兵士等ありて

炬火(たいまつ)を翳し真夜中を走せ
哀れなる人の衣を得んとして罵りさはぎ
さてはその夜を賭物として闇(くじ)をひき
神の驚きをもはやその歎きをも思はざりしを。

また春月も，親友の春夫の推薦をうけたのであろうか，4カ月後の「三田文学」（第2巻第12号）で，この雑誌に寄稿することの出来た唯一の機会を利用して，詩5篇「蟋蟀の歌」「悩める人に」「一詩人のなげき」「基督の愛」「断篇」を発表している。まだかたい蕾であった生田長江門下の両春，春月と春夫が早く開花しようと精進している時代のこれら作品は，1年ほど別々の家に住んだあと，生田長江の要請で，ふたたび本郷の根津西須賀町2番地の，いわゆる「超人社」で共同生活を営んでいた時期の産物であった。

春夫がこの洋館に転居したのは明治44年6月のことであるが，同門の春月以上に意気投合していた堀口大学（明治25～昭58）は，この年の7月，外交官の父親に従って，メキシコ，さらにベルギー，スペイン，ブラジル，ルーマニア等の国々を渡り歩いた。日本に定住してから刊行した第1詩集「月光とピエロ」（大8．1，籾山書店）にさきだち，最初の訳詩集「昨年の花」（大7．4，籾山書店）を刊行している。今日，この訳詩集は「月下の一群」（大14．9，第一書房）の栄光のもとにかくれてしまっているけれども，サマン，グルモンの2詩人の作を多数収め，それにヴェルレエヌ以下の諸詩人の作を加え，仏蘭西詩の若々しい情調を伝えている。しかも，これは象徴派の作品を中心とした永井荷風の「珊瑚集」とも異なり，堀口大学の美的趣向に忠実に，訳しためた詩選である。

春月は，ここでも，訳詩集「昨日の花」ばかりでなく，「スバル」をはじめ明治末から諸雑誌へ寄稿した訳詩の中から，満遍なく各詩人の名詩を16篇選び出している。それらは，ミユッス「フオルチニオの唄」「ニノンさん」，ボオドレエル「幽霊」，ヴェルレエヌ「風」「暗く果なき死のねむり」「われの心に涙降る」，ジアン・モレアス「また秋の来て」，フェルナン・グレエグ「午後の月」，ルミ・ド・グウルモン「暴風雨の薔薇」「夢の面影」，ノワイユ伯爵夫人「幻像」，ジャン・マルク・ベルナアル「今宵また」，レニエエ「黄色の月」，アルベエル・サマン「相伴」「夕暮」，ポオル・フォオル「輪踊り」であり，のちの「月下の一群」にそのまま再録されている作品もあるが，改訳されているものもある。「また秋の来て」を例に見てみよう。

また秋の果て，
朽果てし水車の古池を落葉もて
　被はん時，
また風の来て，破れし戸のすきと
昔挽臼の廻りゐたる空しき
　小屋とを満す時，

またしてもわれかの汀に行きて憩はん，
年経て紅き木蔦を織れる壁に
　身を凭たせつつ
かくてわれ冷めたく寥き水の面に
わが影と青ざめし日の
　消えゆくに眺め入らん。

「泰西名詩名訳集」より

また秋の果て，朽果てし
水車の古池を落葉もて
　被はん時，
また風の来て，破れし戸のすきと
かつて挽臼の廻りゐたる空の
　小屋とを満たす時，

またしてもわれかの汀に行きて憩はん，
年経て紅き木蔦を織れる壁に
　身を凭たせつつ
冷たく寥き水の面に
わが影と青ざめし日の
　消えゆくを眺めん。

「月下の一群」より

堀口大学は，昭和5年5月下旬に，春月の不幸な死を聞いたとき，まだ生田長江のもとに寄宿していた明治43年頃の春月の鋭い眼差や蒼白い顔を思い浮べ，佐藤春夫を通じて知り合った春月の陰欝で孤独な性格と猛烈な勉学意欲と早熟の作詩活動を回想する。そして「春月君が自殺したと聞いて，最初に僕がつぶやいた言葉は，『たうとう心棒が折れたか！』の一語であった。自らの詩の重みの為にこの詩人は挫折したのだ。然し，その折れ口は海の塩のやうに鋼のやうに鋭く光ってゐる。[33]」と，詩の重圧に抗しきれなくなった詩人の死を悼んでいる。

堀口大学が，同じ詩人でありながらも，自らの趣味と稟性との相違から，春月を殊更意識しなかった。これに対して，独逸詩の春月は，仏蘭西詩の堀口大学を意識した。同時代の詩人達のうち，春月のライヴァルは，佐藤春夫でなく，堀口大学であった。大正8年頃，春月にとって，「新しい詩人中では堀口大学氏にまず指を屈せざるを得ない[34]」としても，まだ「一体に創作家としてよりもさらに訳詩歌として卓越してゐる[35]」にすぎなかった。ところが，11年後ともなると，事情がかわっている。昭和5年5月初旬，春月が死の旅につく十日ほど前に，山梨県市川大門町から牛込弁天町44番地の春月宅を訪れた渡辺陸三（明35～昭55，詩人・西洋文学研究家）の一文が，それを伝えている。「……小石川辺の高台に見えるキラキラと輝く灯火を指さしあの辺に堀口大学君の屋敷があるんです，『月下の一群』……パルナッシャンかね……と一人でつぶやくように言い，クスクスと笑っているのだ。一寸薄気味の悪い感じでこちらもと

まどい，豪華な訳詩集ですが高価で高嶺の花ですと返事したが後日になって見，堀口大学氏には十分ライバル意識があった事が解った。[36]」春月のこの不気味な笑いは，何に向けられたものであろうか。堀口大学の人格に向けられたものであろうか。それとも，瀟洒で知的に洗練され，また官能的なほど都会的感覚をちりばめた詩世界へ向けられたものであろうか。春月の門を叩いた少壮の詩人達の多くは，情感の詩に満ち足りず，思想詩の領域を拓こうと苦闘する春月に心をひかれた人達であった。 それだけに， 松尾啓吉（明40－，詩人・ハイデッガー研究家）のように，堀口大学が感性をダンディで緻密な造形美へかえることに終り，日本の詩の成育を阻害した，と主張する人達もいる。それは，兎も角，昭和4年9月の現代詩人全集第8巻で，「生田春月・堀口大学・佐藤春夫集」（新潮社刊）として，明治25年生まれの3詩人が大正期から昭和期初頭の代表詩人に扱われているのは，奇しき縁と言えよう。

次に，ここで三田の出身者で，忘れてならない翻訳家がいる。それは，オマア・カイアム原著「ルパイヤット」（大3．3，開文館）を訳した脱牛片野文吉（明17～大2）である。水戸中学校より慶応義塾普通部へ転校して来た明治33年頃，彼は星花の筆者で，美文小説，短歌，新体詩を創っていた。彼は高山樗牛を敬愛していたこと，また泰西の名画の中に，捕らわれた牛が脱する奔放の有様を見て，それへ思想的意義を加えて筆名にしたのである。ロセッチ，スヰンバアン，テニソン，イエエツを愛読していたが，大学へ進むとき，カント哲学に興味を持ち， またジェームズのプラグマチズムとシルレルのヒューマニズムを研究したく，哲学を専攻した。

「ルパイヤット」（「四行詩集」1059）は，19世紀にE.フィツジェラルドの名訳によって，世紀末の諸詩人の共感を呼んだ。わが国では，上田敏の“The Modern Lyre”に収録され，これを使用して，片野脱牛より以前に，蒲原有明が「芸苑」（明40．4）に訳出している。今日でこそ，原典からの直接訳もあるが，片野脱牛は，慶応大学でマッカシイの散文訳を使用したあと，あらためてフィツゼラルドの散文訳によって，オマア・カイアム研究にうちこんだ。自由訳で466篇の訳詩を仕上げたとき，彼は結核に犯されていた。彼の労作を讃えるため，かって彼に教授した英国帝室文芸院員エドワァド・クラアク，上田敏，川合貞一，永井荘吉が序文を寄せ，与謝野寛が結びの一文を添え，そして馬場孤蝶が校閲を担当している。

おゝ「ケエヤム」よ，汝酔へる時楽しめ，汝の婦(おんな)と共にある時喜べ，此世界の終局は虚無なるを以て，汝は無きものと思ひ，汝の在る間楽めよ。

生の無常を嘆きながらも，葡萄酒・女性・竪琴をたたえ，これらで生の苦悩をいやす思想には，春月も共鳴し，片野脱牛の「ルパイヤット」から6篇ほど採っている。

1983．4．10　　（つづく）

註

(21) 生田春月「阿部次郎氏を論ず」(「新潮」大4．6）P．14.

(22) ibid. P．15.

(23) 西崎花世「結婚」(「青鞜」大3．6）P．67－68.

(24) ibid．P．77.

(25) 西崎花世「吾が生きかた（感想)」(「青鞜」大3．2）P．54.

(26) ibid．P．57.

(27) 西崎花世「結婚」(「青鞜」大3．6）P．78.

(28) 参照　「それから当時『帝国文学』の主幹であった小林愛雄氏の知遇を得て，同誌に殆んど毎号のやうに詩を載せて頂いた。氏は大変私を認めて下さって，編集の手伝までさせてくれ，いろいろ有益な教示を得た。」生田春月「文壇へ出るまで」(「文章倶楽部」大9．6所載）P．42．なお，折竹錫は明治41年から2年間編集員であった。

(29) 生田春月「文壇へ出るまで」(「文章倶楽部」大9．6）P．42.

(30) 与謝野寛「リラの花」(大3．11，東雲堂）P．15.

(31) 生田春月編「泰西名詩名訳集」P．297.

(32) ibid．P．4．

(33) 堀口大学「生田春月君の死」(「若草」昭5．7）P．64.

(34) 生田春月編「泰西名詩名訳集」P．295.

(35) ibid．P．297.

(36) 渡辺陸三「詩人春月氏の覚書――資料に添えて――」(パンフレット「日本近代文学館」第16号，昭48．11．15）P．10.